

路上生活者の個人史

第18回

竹中尚文

千葉 賢太郎 氏(仮名)

1953 生まれ。72 歳

私は愛媛県で昭和 28 年に生まれました。現在 72 歳です。父親は漁師でした。私と弟と両親という 4 人家族でした。小学校、中学校を卒業して、私は就職で大阪に出てきました。町工場で機械の部品を作る工場でした。田舎育ちですから、都会の生活にあこがれがありました。あこがれだけだったかもしれませんが。「金の卵」と呼ばれた時代でした。町工場は 1 年あまりで辞めて、田舎に帰りました。都会の生活は馴染めなかったですね。

田舎に帰って、父親の船に乗りました。3 トンほどの小型船

です。父親に漁師の仕事を教わりました。父親は、もっと昔にはもっと大きな船で漁をしていましたが、嵐に遭って九死に一生という思いで帰ってきました。それから小さな船で漁をするようになっていました。

私も独立して漁師として生活をするようになって、30 歳の頃に結婚をしました。娘が 2 人生まれて、幸せな時代でした。その頃は底引き網の船で操業していました。40 代後半の頃に離婚しました。子どもたちは中高生でした。原因は経済的なものでした。底引き網というのは燃料費がしっかりとかかるものでした。おまけに網が破れたり、思

うような水揚げができなかったりすると、しっかり赤字です。あの頃は燃料費が高くなって、漁師には辛い時代でした。女房は子どもたちを連れて、出て行きました。それから、数年後には船を手放して、大阪に出てきました。女房、子どもたちは地元で暮らしているそうです。子どもたちは、結婚して子どもができています。幸せに暮らしてきてくれたら、それでいいです。何もしてやれんですが。

大阪に出てきて公園とかで寝る生活をして、日雇いで土木の仕事に就くようになりました。日雇いですから、毎日仕事があるわけではありません。断続的に路上生活が続きました。2009年でしたか、アメリカでひどい

不況が起きた頃に生活保護を受けられるようになりました。60歳になっていませんでしたが、飯場の仕事もなくなってきて路上生活になった頃でしたから、助かりました。

昨年、故郷に近い街で倒れました。頭の中で出血していたそうで、頭を開く手術をして助かりました。後遺症も何にもないようで、ありがたかったです。それから大阪に戻ってきました。大阪以外の街では、生活できないですよ。大阪だと、どこかでこうした炊き出しなどがほぼ毎日あります。私が倒れた街だと、一週間か二週間に一回の炊き出しがあるようなことです。生きていけないですよ。

ずいぶん前のニュースで燃料費高騰が流れたという記憶がある。その時、多くの漁師の方が困ったという話だった。私も自動車を使う生活で節約をした記憶がある。しかし、その時が過ぎてしまえば忘れていた。同じ時にそのことで人生が変わった人たちもいたのだ。また、燃料が高騰しようとしている。戦争を始める人たちはそのことでどんな被害が出ているか知りもしない。